

自分を大切だと思える心を育てる『心の土壌作り』

自分らしい人生を自分の足で歩めるように

京都市弓削保育所 中村早希

1 京北域の概要

弓削保育所は京北域(京都市の北西部, 右京区)に位置し, 西と北は南丹市に接している。面積は, 2 1 7. 6 8 k m²で京都市全体の4分の1を占め, その93%は豊かな森林である。旧京北町は昭和30年3月に周山町, 細野村, 宇津村, 山国村, 黒田村及び弓削村の1町5村が合併し, 発足した。その後, 通勤通学等の日常生活圏が一体化したことから, 平成17年4月に京都市に合併された。

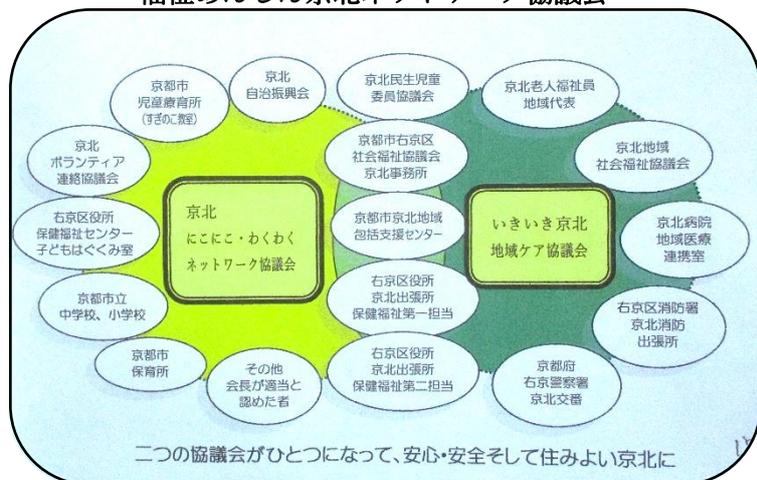


京都市でありながら昔ながらの田園風景や茅葺屋根の家屋の残るとても自然豊かな地域である。京北域全体が丹波高原の中にあり, 京北域の人々は豊かな森林, 花や緑, 蛍の舞う清流などの自然を大切に守り育ててきた。また, 北山杉を主としてヒノキなど多様な木材や薪炭の加工供給する林業, 田んぼや京北特産の野菜の生育, 出荷をする農業を担いながら, 地域の自然資源とともに暮らしを支えてきた。

しかし, 平成8年より, 人口は減少傾向にあり, 過疎化, 少子高齢化に直面している。京北の人口は約5, 200人(平成27年度の推計)であるが, 現在空き家や耕作放棄地が増えている。50年後には人口は更に減り, 1, 000人を下回ると予測される。京都市の高齢化率が26.3%に対して京北地域の6地区の平均高齢化率は41%を越え, 農業林業の従事者は高齢化に伴い減少している。高校は公立の京都府立北桑田高校があるが, 大学がないので, 高校を卒業すると市内や他府県に出て, 一人暮らしを始める子がほとんどである。合併10年を区切りに, 平成27年に京都市は「京都 京北未来かがやきビジョン」を策定し, 若者や, 子育て世代を中心とした定住促進・新たな雇用創出などに照準を合わせた各種施策を掲げて, 未来の住民へ, 京北域の豊かな自然を引き継いでいく取り組みを進めている。

少子高齢化は京北域最大の課題であり, 弓削地域の子ども達が入学する, 京北第3小学校区でも子育て家庭は非常に少なくなっている。2020年には, 3小学校と1中学校が一体化した, 小中一貫校として発足する準備を進められている。現在, 京北域の豊かな自然, 伝統文化, 歴史を表現した「京北」に, 地域, 保護者, 教職員の子ども達への思いがこめられた文字を組み合わせた校名を募集し検討されているところである。また, 通学安全に係るシミュレーションも, 各関係機関と連携しながら実施されている。

福祉あんしん京北ネットワーク協議会



京北域全体の子育て支援として「京北にここ・わくわくネットワーク協議会」が平成22年4月に設立され地元の自治振興会をはじめ、区役所、社会福祉協議会、民生委員、ボランティア連絡協議会、教育機関、保育所等が連携を図り運営している。保護者自身が集う場が少ない状況の中、保護者同士を繋いだり、育児の悩みや不安の解消に繋がったりするようにと、京北出張所の3階で“京北にここ広場”として月曜日から金曜日まで祝日を除いて開所している。平成26年1月には児童家庭課より事業委託を受け「京都市子育て支援活動いきいきセンターつどいの広場」として拡大運営されてきた経過がある。また、平成30年4月には、「京北にここわくわくネットワーク協議会」と「いきいき京北地域ケア協議会」（区役所、社会福祉協議会、民生委員、京北病院、包括センター、警察、消防署等）が1本化され「福祉あんしん京北ネットワーク協議会」として発足した。まさしく、地域ぐるみで乳幼児から高齢者まで地域全体で見守っていかうというネットワークとして始動した。

2 弓削保育所の状況

弓削保育所は、京北域にある公立保育所のうちの一つである。以前は細野保育所、宇津保育所も開所していたが、人口減少に伴い休所となり、現在は、周山保育所、ひかり保育所、弓削保育所の3箇所のみ開所している。京北域には民間保育園、幼稚園がないので、公立保育所が唯一の就学前通所施設である。

弓削保育所のある弓削地域には、13の地区（上川、下川、十一、沢尻、筒江、上中、下中、鳥谷、田貫、下弓削、金屋、井崎、塩田）がある。春は、弓削川に並ぶ桜で川が淡いピンク色に染まり、夏は田んぼの稲が青々と生い茂る。秋には栗やどんぐりなどの木の実が豊かに実り、イチョウの絨毯で遊ぶ場所がある。冬には、子どもがそり遊びを楽しめるほどに雪が積もる。1年を通して、目で、肌で、香りで、音で季節を感じることができる。加えて、タケノコやヨモギ、ワラビ、栗などの山の幸も豊富にあり、子ども達はまさに五感の全てを使いながら過ごすことのできる環境である。

弓削保育所の平成30年度の子ども数は、乳児12名(0歳2名、1歳2名、2歳児8名)、幼児14名(3歳2名、4歳4名、5歳8名)(平成30年度9月現在)、職員11名(保育士、調理師一正職4名、嘱託職員4名、臨時的任用職員5日勤務1名、3日勤務1名、2日勤務1名)である。京北地域全体に過疎化が進んできているが、弓削保育所が位置する金屋団地



でも、子育て家庭が激減している。金屋団地には公園等の施設がないので、保育所の休所日には園庭を開放しているが、利用される家庭は少ない。開所日には、親子で保育所に来所し入所児童と一緒に交流する中で、子どもの姿を通して子どもの育ちや遊びの理解を深め、子育ての悩みを聞いたりしながらの子育て支援を保育所が担うべき役割と考えているが、数名しか利用されていない。

保護者は、自営業や農家、森林組合、地域の病院、介護施設等地域の中で働いてる人が多い。二世帯、三世帯家族もあり保育所の送迎は、父母だけでなく祖父母や親戚の方も来られる。都市部まで仕事に出ている保護者もおられるが、家事や育児に協力者の多い家庭が多いので、保護者もゆったりと子どもに関わられている。地域の中では、昔から顔見知り同士も多く、近所付き合いも盛んで、送迎時には、保護者同士で談笑され、子どもについて話されている姿もよく見られる。自然環境の豊かな中での生活に憧れて、他都市からの移住家庭はあるが、近所に子育て世代が少ないことや慣れない土地で身近な相談相手が少なく、苦勞されている姿も見られる。そのような背景を把握し保育所は、日々の子育てだけでなく生活の中での思いも受け止めながら、保護者を地域と繋ぎ、また、心の拠り所となるような関係を築けるよう心掛けている。

子ども達は、家庭の中で大人や年の離れた兄弟に囲まれて過ごしており、気持ちの安定している子どもが多い。一方で、大人や兄弟からの手助けが多く、「どうやるかわからん」「できない」「～やって」と甘える姿が見られる。家庭では家の畑や田んぼの手伝いや、近所の川や沢で遊ぶこともあるが、子どもが安心して遊べる施設や学びの施設が少ないことから、ゲームやテレビを見て過ごすことが多くなっている現状がある。また、色々な体験をしてもらいたいという保護者の思いもあり、習い事のために旧市内まで出かける家庭もある。



3 保育のねらい

弓削保育所の子ども達は、家庭の中でも地域の中でも、温かな見守りに包まれ愛情一杯に育ててもらっている子どもが多い。大人に囲まれた環境の中で、自分の思いをしっかりと受け止めてもらえる反面、大人の手助けや先回りした援助が多く、自分で試行錯誤する経験、行動した後に感じる成功体験が少ないように感じていた。また、自然に恵まれた地域であるものの、休日には都市部へ遊びに出かけることも多く、車での移動が基本となり体を動かす経験が実は少ない。これらの姿をふまえ、子ども自身が自

分の体で、心で感じ、考え、そしてその思いを表現できる力をつけて欲しい、そのためには経験が必要であると考え、“心踊る経験を 表現する喜びを”と年間のテーマに掲げ、生活の中で実体験を重ねることをねらいにした。点数で評価できる力ではなく様々な困難に出会った時に、人との繋がりや自分の経験から未来を切り開ける力をつけて欲しい。乳幼児期に蓄えた力が人間形成の土台となり、今後に繋がるような保育を進めたいと思っている。

京北の里山の自然環境や人間関係は、その力をつける経験ができる場であると感じている。地域の外ではなく、育つ地域の中にある魅力を保護者と共に語り合いたい。そして、保護者だけでなく、交流のある中学、高校、高齢者施設などを含めた地域へ、また保育所に訪れる人々へ、弓削保育所の保育を分かりやすく視覚的に伝えられるドキュメンテーションを活用することにした。

4 ドキュメンテーションを通して 「子どもと繋ぐ、保護者と繋ぐ、地域と繋ぐ」

ドキュメンテーションを利用した保育の発信は、3年前から進めてきた。ドキュメンテーションを描くにあたって工夫してきたことは、①子どもの夢中になっている瞬間②友だちや自然との関わりの中でのエピソード③保育士の意図を取り上げるようにしてきたことである。①は保護者や月齢の低い子どもでもパッと見て分かるようにしている。②は子どもの心の代弁である。子ども同士のやり取りの中にある心の動きを文字に起こして伝える。一番描いていきたいと思うが、その場面を捉えるためには保育士として保育を観る視点を養っていかねばならず、自分の保育を振り返りながら、伝えたい思いを表現する過程に時間をかけて向き合うこともある。これは私自身が時間をかけて実感と共に経験を重ね、日々成長していきたい点である。③は保育の中で、子どもに“なぜそれを伝えているのか”という保育のねらいの発信である。遊びが、子どもの体、心にとってどのような意味があるのかを伝えている。



その日のドキュメンテーションは、玄関の入口のところに掲示しており、保育所への訪問者の目にも留まるようにしている。また、それまでのドキュメンテーションもファイリングし玄関に置いていることで、子ども達も自由に見ることができ、今までの様子を思い返したり友だち同士で思いを共有したりしている。また、保護者と一緒に見返して「こんなしたんやで」と会話

のスパイスになったり数ヶ月前の姿に「大きくなったなあ」と成長を感じている姿もある。

ドキュメンテーションを描いていくうちに、この方法が保護者の中にも浸透していつていることを実感している出来事があった。自閉症のS児の母は、保育所に来る度に嬉しそうにドキュメンテーションを眺めていた。「毎日、楽しみにしている。うちの子は保育所での出来事を上手く話せないけれど、みんなと楽しい瞬間を共有していることがよく分かるの

で嬉しい。」と話されてた。また、行事の際に貼り出すことで、地域の方や保育所に普段来られない保護者の方にも、日々の様子を知らせることが出来る。保育を、子どもの姿を、ドキュメンテーションを通して共有していくことで、子どもと保護者、保護者と保育所、保育所と地域を繋げていく手助けになっていると実感している。

5 心躍る経験を 「雨の日散歩」



梅雨期に子ども達と合羽を着て、傘を持って散歩に出かけた。雨降り散歩の予定を伝えると、雨が降ることをとても楽しみに待ち望んでいた子ども達であった。この散歩は車通りの少ないコースを選び、手を繋がず、自由に探索を楽しんだ。というのも、探索をする中で、子ども達に自分でおもしろいこと発見し、周囲と共有する喜びを感じて欲しいというねらいがあった。一人が水たまりを見つければ、そこに集まり、水たまりを走り抜けたり、その場で跳ねたり、水の感触を楽しんでいた。家庭の中での散歩では、きっと「汚れるし、やめなさい。」と言われる

ことである。それをあえてする。自分で見つけた喜び、それを友だちと共有している時、大人のいない世界の中で、夢中になる子どものいたずらな表情はとても生き活きとしていた。葉の上のくもの巣に落ちる滴を眺めている子どももいれば、生き物がどこに隠れているのか探す子どももいる。自分の心の興味にそっと向き合い、じっくりと楽しむ子どもの真剣な表情もまた、輝いて見える。

雨の日の散歩は服装もいつもとは異なる。合羽に長靴、そして傘。三種の神器にも勝るその装備に子ども達もウキウキと心を弾ませていた。散歩の前にはまず、傘の扱いについて子ども達と考えた。雨から身を守るための傘だが、散歩に出たときは小雨で、傘を差すほどでもなかったので、「どうやって持てばいいだろうか？」と問いかけた。年長児年中児の子ども達からは「よこにもつ」「ボタンでとじておく」と声が上がった。更に保育士が「なんでそうするの？」と聞くと「あたるかもしれん」と年長児が答える。その様子を見ている年少児。保育士が教え込むのではなく、子どもが考えるための言葉を投げかける。考えて答えを出せる子、他児の答えから学ぶ子、それぞれの学びが出来る異年齢。保育士は子どもの言葉を拾い、実際に起こりえる状況を再現して、傘が目や顔に当たることの危険性を確認した。雨の日はいつも歩く草むらや小さい土手も石の上も濡れている。小さな土手を子ども達と歩いてみた。手が濡れることを嫌がり、足だけで登ろうとする子ども、手をつきながらも濡れた地面で足元が滑り、登りにくそうにする子どももいた。そして一言「せんせいー、すべんねんけど」その言葉を「待ちました」と心の中で思いながら、「ほんまやな、雨の日は草も石も濡れて滑りやすいから注意してね。先生も気をつけよ。」と伝えた。子ども達の中で

も、大きい子は小さい子の横で「すべるなあ」と声を掛けながら、探索を続けた。子ども達にとっては休日などに保育所外で遊ぶことのある生活圏。その中で遭遇する状況ごとの危険性も知らせながら、散歩に行っている。子ども達が保育中はもちろん、休日でも里の中で心ゆくまで楽しみ、安全に遊べるよう常に伝えている。

6 自然を感じる、自分を感じる「もり、たんけん」

豊かな山の中で遊び、育つ子ども達だからこそ、山に、沢に、川に親しみを持ち、育つ里を大切に思うことのできる子ども達になって欲しいという願いを込めて、まずは山の心地良さを感じる経験を重ねている。森の中には、たくさんの感触がある。ふかふかの腐葉土。上を歩くとぼきぼきと折れる小枝の山。ふわふわでしっとりした苔。冷たい川の水。光



差し込む木漏れ日。とげとげの葉っぱ。肌の、足裏の、手の平の、全身の感覚から得られる経験がある。また、平らな面は一切無く、四肢を使いどこに足をかければ登れるか、落ちずに降りられるのか、子どもは自分の体の動きと相談しながら、他児の姿を真似ながら、山の中を跳ね回っている。できる限り保育士は手を貸さず、危険が予測される子どもには側で見守るようにしている。

山の中での探検には声に出さなくても“やってみよう”や“できるかな、どうかな”と心が動く瞬間が多々ある。子どもが自分で、登っていく感覚と経験は、考えることに繋がり、“言われて、やる”のではなく、“自分が決めた、やる”を重ねることが次の一步に繋がっていく。



保育士は、子ども自身の心のゆらぐ時間も大切な過程として捉え、心の動きの見守りを通して支え続けている。

心のゆらぎの先は必ずしも、挑むことが選択肢ではない。例えば、沢でのジャンプ。「とべるかなあ」「おちたらこわいなあ」と迷う子どもの思いもある。勇気を出して飛び、飛べる力がついていくことも望ましい体の発達だが、怖いときには自分の判断でやめることも必要な自己決定力である。自分の体を知り、怪我を防ぐためにも「無理だな、と思ったらやめたらいいよ。」と伝えている。そこでやめても、保育士が子どもの心が向くことを待つことで、子どものタイミングでまた“やってみよう”と向かう瞬間がきつと来るであろうし、達成した時に、自分の体が、心が成

長していることもより実感できると考える。「あっちからのぼってみよう」「おともだちはどうしてるかな」そして「やった、できた」という瞬間に子どもは保育士と目が合い、嬉しさが溢れて保育士に報告に来る。自然に、ゆるやかに、しかし、しっかりと心の深いところにそっと経験と成功体験が溜まっていく。

散歩は日々感じる事が多くあり、その積み重ねが子どもの心を豊かにしていくと考えている。面白いこと、上手いかなかったこと、不思議に思ったことや心地よいと思ったこと、食べておいしかったこと等全ての経験が、良い悪いだけで判断されるものではない。子どもの経験の一つとして残っていく。自らが感じ、考えていくからこそ、子どもの心の深いところにそっと残っていくと信じている。

この感じる、考えるためには保育に関わる者の“信じて待つ”姿勢がとても重要になってくる。保育の中で感じる、考える時間とは、他人が主体には決してならない。その子ども自身にしか感じられない感性があり、考えられないことがある。座っているだけのように見えても、光の暖かさや輝きを感じている大切な瞬間がある。子どもが自分なりに言葉や行動を考えている時、その子どもの言動、思考の機会をしっかりと“待つ”ことで、延いては子どものそれぞれの成長を受け止め、支えていくことに繋がっていくように思う。感じる瞬間を待つ、行動する瞬間を待つ、という二つの“待つ”を積み重ねることを大事にしている。

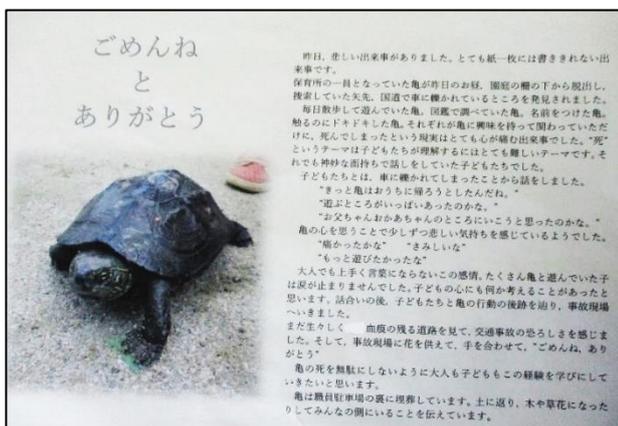
小さなことでも自分で決めるという経験は、生涯に渡って自分の人生を生きるということに繋がると考えている。集団が大きくなればなるほど、多様な子どもの姿にこの“待つ”が実践しにくくなるので、今の小さな集団の利点と感じ、大切に関わっている。

7 命に触れる 「カメの事故」

保育での体験は、いつも楽しいことやワクワクすることばかりではない。それがカメと過ごした経験にある。

保護者の方から、「カメを見かけることが、地元の田んぼや川や池でも少なくなってきた。自分が小さい頃から田んぼで飼っているカメを子ども達に育ててもらい、カメを身近に見て欲しい。」との申し入れがあり、保育所で飼

うことになった。園庭を自由に散歩するカメの後ろを追いかける子、カメの家づくりをする子、餌をあげる子がいた。広い田んぼの中で暮らしていたカメを、園庭散歩の時間以外はカメの家に入れなくてはならず、園庭に出ると予想を反するスピードでよく歩いた。カメが広い空間を自由に歩けるように、また所外に出て危険な目にあわないようにと柵の間隙を埋めた。けれども、ある日の昼前からカメが行方不明となりみんなで大探しした。「金屋団地を散歩していた。」と近隣の住民の方が見つけてくださり無事に戻ってきた。無事だったカ



メを見て「おうちがいいのかなあ」と口にする子どももいた。毎日保育所で過ごしているうちに、カメは園庭にある田んぼや池のムラサキシキブの下の木陰を気に入った様子だったが、広い田んぼには敵わない。その数日後、またもやカメが園庭で見当たらなくなった。子ども達と草むらや田んぼや池の周りを探しても見つからない。そして、その日の夕方、「カメが保育所下の道路で轢かれている。」と地域住民の方から連絡が入った。職員が急いでその場に向かったが、カメはもう虫の息で職員一同、後悔と悲しみに暮れた。翌朝、子ども達にカメの死について話した。よく世話をして遊んでいた子ども達は、悲しくて涙が止まらなかった。その姿に悲しみを感ずる子どももいた。話をした後、子ども達とカメが事故にあった現場まで散歩に行った。まだ、生々しく残るカメの血痕が事故の悲惨さを物語っていた。「カメははやくおうちにかえろうとしてたのかなあ」「かあさんがメ、しんばいしてまってるかなあ」とカメに思いを寄せる姿があった。カメの死を感じ考える姿があり、無駄にはしてはいけないと保育士も強く感じた。子ども達には車の危険性も含めて話し、裏庭に埋葬し手を合わせた。それ以降、子どもの中には散歩で通ったり、カメの写真を見ては事故のことを思い出す様子がある。望んで起きた出来事ではなかったが、この事をマイナスにだけ捉えるのではなく、悲しみの経験ができたことに感謝をし、これからの糧にしていけるように保育士も関わっていきたく強く思った。

8 地域の中で 「みんなで作る保育 みんなが輝く保育」

弓削保育所で保育をしていると、保育が保育士だけで作り上げられるものではないことを日々感じる。職員会議は勿論のこと、休憩時間や事務所で顔を合わせた時等に、子どもの様子、保育の内容、保育の中で保育士が感じたこと、悩みを伝えてきた。職員間で思いを共有し、語り合う中でアイデアを出し合い、ヒントを得ることも多々ある。乳幼児合わせても30人いない保育所での保育は、異年齢で過ごすことが日常で、職員間の連携は必須条件である。クラスの担任だけではなく、職員はどの子ども達とも関わりを持ち、育ちを見守っている。子どもの姿や活動に合わせて、各クラスの保育士が声をかけて乳児が幼児で、幼児が乳児で交流し、散歩や合同の時間を過ごしている。各年齢の遊び、発達の保障のしにくさという異年齢保育の難しさはもちろんあるが、年齢の垣根を越えて過ごせるからこそ、それぞれの子ども達の居場所があり、その子どものペースで成長していく姿をしっかりと認めることが出来る。職員には、子どもをあたたく包み込む雰囲気溢れている。





年間を通し、北桑田高校や高齢者施設との継続した交流を続けている。子ども達は高校生と関わることで学び、逆に高校生も自分のルーツを振り返ったり、子どもを理解したりする。子どもにとっても、高校生にとっても今後に繋がっていく取り組みであると感じている。町のスーパーで子どもと高校生が出会うと、高校生から子どもに言葉をかけてくれることもある。

地域の方も、子ども達が散歩をしていると、子どもの声を聞いて顔を出して言葉をかけてくださる。子どもの数や子どもが外で遊ぶ機会が減り、町が静かになっているからこそ、子ども達が地域に出ることで、町が明るくなり、周囲に笑顔が広がる。季節の花のお裾分けを頂いたり、沢蟹の住処や地域特有の草花の使い方を教えてもらったり、この地での生活の知恵を伝授してもらえる貴重な体験である。地域の中で出会う人々にも、保育の中身を伝え、保育所だけでは達成できない畑や田んぼ、しいたけ栽培に関する講師依頼等、教えを請うと気持ちよく応えてくださる。日々の保育の中で、地域の中で支えてもらいながら、共に子どもの育ちを見守ることができる。

地域も保育所も小規模ではあるが、温もりを感じさせる繋がりがある。保育所職員が自治会の夏祭りや運動会へ参加することで、より一人一人の距離は近くなり繋がりも深まる。子どもも大人も地域の温かさを感じながら、地域に住む人、保育に関わる人、それぞれの経験を活かして、乳幼児から高齢者までみんなが輝ける保育を今後も展開していきたい。

9 まとめ

保育する営みの中で、目の前にいる子どもの表面的な姿のみを捉えるのではなく、その子の背景までを含めた視点を持ち毎日を過ごしてきた。保育士の心を子どもの心に寄り添わせることで信頼関係を深め、子ども達の行動やしぐさから、今感じている心を読み取れるように努力してきた。一人一人が自分を大切に感じられる心を、目には見えない子どもの心の深い部分をしっかりと育てていくために、体の経験と心の経験をその子自身が重ねていくことが大切であり、この積み重ねが『心の土壌作り』に繋がると考えてきた。

里の豊かな自然の中で、子どもが散歩先で摘んできた山菜を、保育所に到着後直ぐに嬉しそうに給食室へ持って行く。調理師が直ぐに調理して、天ぷらや和え物にして、その日の給食に一品添える。季節を感じる、食べられる山菜という認識が子ども達の生活の中に自然と根付く。保育士と調理師がひとつになることで、子ども達の五感を育てる経験を積み重ねる保育の展開を深めることができる。豊かな自然環境に取り囲まれているからこそできることである。

また、ドキュメンテーションを活用して、保育士が目指している保育の発信を続けてきた。子ども達の今の姿を大切にしながら、保育士自身も保護者もその経験から成長していく我

が子の姿を“信じて待つ”関わりをする。今までの積み重ねを大切に、今後もドキュメンテーションを通して、目には見えない感覚や出来事を言葉や写真で表面化して描き、子どもの育ちを支える弓削保育所の保育を伝え続けていきたい。

日々の生活の中で、地域の方々が長年培われてきた自然との関わり方や知恵や技術からの教えは学ぶことが多く、実体験を重ねた保育の展開は、教育的な学びに繋がることを実感している。“三つ子の魂百まで”と言われるように、保育所で毎日遊びから学んだことを糧に、困難に出遭っても仲間と共に乗り越えていく子どもであって欲しい。

10年後、20年後には、育った環境を愛し、自分自身を大切に思える人となり、自分の決めた道を信じまっすぐ歩いて生きていくことを願う。

10 おわりに

京北域で働いて3年になる。地域の中で過ごせば過すほど、この地域の良さを感じた。そして、この地でしか出来ない保育の面白さを伝えたい思いが強くなり、今回実践報告という形で残すに至った。

弓削保育所への異動が初めての異動だった私にとって、自然豊かで旧市内とは大きく環境の異なる地での毎日の出来事は、新鮮でわくわくの連続だった。一方で、職員母体の小さい環境で一保育士として責任を果たせるか、自分のしたい保育が分からず自信が持てず、不安な日々が続いた。しかし、先輩保育士、調理師、保護者に成長を見守ってもらいながら、次第に保育を通して自分のペースで感じ、学び、前に進んでいけば良いのだと感じるようになった。それは、保育に対する考え方にも繋がっている。保育所時代が子どもの人生の全てではない。人生の土台作りとして、遊びを通して経験を重ねていく力が、必ずしも、“いま”発揮されるかはわからない。それぞれの子どもが自分の力を蓄えて発揮していく時期は違うのだから、その子の体と心の成長を信じ、焦らずその子のペースで成長していけばいいと感じている。

地域における家庭数も子どもも職員数も少ない。しかしながら、一人一人の存在は大きく、強く感じられる環境である。子どもの関わり、事務、環境づくりと保育を一人でやり切れる力が無いことも実感したが、子どもにも個性があるように保育士にも個性があり、得意不得意がある。職員同士頼ったり頼られたりしながら、集団の中で助け合って保育をしていくことの大切さを弓削保育所で学んだ。職員も小さい集団であるからこそ、意見交流も活発にできる事をプラスと捉え、互いを信じ支え前に進む。職員関係の良さがチームワークの良さに繋がり、日々の保育の展開に通ずることを実感している。

私自身が、今の環境で自分の存在をしっかりと受け止めてもらい成長していけることに喜びを感じている。この喜びを胸に噛み締め、地域に関わる一人一人の良さが最大限に輝く保育を今後も目指していきたい。

